

令和五年度 東京純心大学 看護学部 看護学科

一般選抜試験（第一回）【国語】試験問題

試験時間 60分 問題は1～6ページ

注意事項

- ・ 解答は、解答用紙に記入すること。
- ・ 問題用紙は、試験終了後回収する。

受験番号

令和5年1月29日

□ 次の文章を読み、以下の設問に答えなさい。

最近、言葉の意味や物の定義の変化についてよく考える。それらが時代とともに変化することを一般則としては知っているけれど、自分がその変化に立ち会っていない言葉や物に対しては、注意していてもやっぱり理解が及ばない。たとえば明治・大正の頃に書かれた小説を読むとき、私は当時の町の風景や、男女の力関係や、大卒者が社会全体に占める①ヒリツとそのイメージなどを正しく理解せずには読んでいない。

そのことと直接結びつくわけでは全然ないのだが、私はいつか自分の学生時代のことを小説に書きたいと思っている（と言っても、早くても十年後だろうか）。タイトルだけはとっくの昔から決めてあって、『アグネス・ラムのいた頃』だ。アグネス・ラムというのは、七五年から七七年くらいに人気の②ゼツチョウ期だった（それが私の大学生時代とほぼ重なる）、ハワイ出身の小麦色に日焼けして胸が大きいグラビア・モデルで、私と同世代の人間だったら生涯忘れることのない名前だ。だからその小説は、「私の同世代」という特定の読者に向けて書かれることになる。小説を広く売るためには自分より若い読者に向けて書く方がいいのはわかっているが、そうすると私は（ア）嘘を書かなければならなくなる。言葉や物のイメージや定義が変わってしまったからだ。

その代表格が「好きな女の子に電話をかける」という行為だったことは言うまでもない。中学のうちから携帯電話を持って育った人たちに、一家に一台ずつしか電話がなかった頃に必要とされた「勇氣」はわからない。あるいは一見もつと（イ）些細な、「レコードを買う」ということの意味もわからない。

七〇年代当時、LPレコードは一枚二五〇〇円だった。あれから三十年経って、物価が変わったにもかかわらずCDの値段はたいして変わっていないどころか、安くなっているものも沢山ある。「四畳半・風呂なし」の③ヤチンが一月二万円以下だったときにレコードが二五〇〇円なのだから、音楽はたんなる趣味の問題を超えた、「信仰」だった。

さらにもっと細かいことでは、町にはまだコンビニがほとんどなかった。日用品でも、シャープペンはいよいよちゅう芯が詰まり、ホチキスは残り二、三個になった針は変な風に曲がって使えなかった（④オドロクことに今はそんなことはない）。

そういうすべてが違っていた時代のことを(A)ノスタルジックに書くことは簡単だ。ノスタルジックに書けば、他の世代の人にも理解してもらえる。けれど、それでは上っ面を(U)撫でるだけで、当時を生きた人たちの本当の気分や思考形態(?)は描けない。

世代ごとに、他の世代には理解されない内面があって、今と当時の差に満足することを⑤シユガンにおくノスタルジックな話は決してそこに踏み込まない。——というか、過去をノスタルジックに語ることは、結局過去でなくて現在を語ることにしかならないのではないかと思う。少年期を回想する本が定期的にベストセラーになるけれど、そういう本が(B)おしなべて読みやすい理由は、本当のところ(I)「過去」でなく「いま」を書いているからなのではないかと思う。

(出典 保坂和志 著「ノスタルジーでない過去」『猫の散歩道』 中央公論新社 二〇一一年二月二五日)による)

設問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に直し、(ア)～(ウ)の漢字の読みをひらがなで書きなさい。(送りがなを記す必要はない。)

- ① ヒリツ                      ② ゼツチョウ                      ③ ヤチン                      ④ オドロ(く)                      ⑤ シュガン

(ア)嘘                      (イ)些細                      (ウ)撫(でる)

設問二 傍線部(A)・(B)の言葉の意味を簡潔に記しなさい。

(A)ノスタルジック                      (B)おしなべて

設問三 本文中には、二重傍線部“私の同世代”“勇氣”“信仰”と、三か所にカッコ(“”)が用いられている。この記号は通常、その言葉を強調する場合や、本来とは少し異なる意味で使われる場合などに、用いられることがある。これを踏まえて、次の問いに答えなさい。

(一) “私の同世代”とカッコがつけられているのは、どのような意味を込めていると考えられるか。簡潔に記し、またその理由となる言葉を本文中から示しなさい。

(二) “勇氣”“信仰”を国語辞書で引くと、次のような意味が書かれている。

勇氣Ⅱいさましい意気。困難や危険を恐れない心。

信仰Ⅱ神仏などを信じてあがめること。特定の対象を絶対のものとして信じて疑わないこと。

これらを参考にして、本文中のそれぞれの場合に当てはめると、何がどうであることをどのように呼んでいるのか、わかりやすく説明しなさい。

設問四 傍線部(Ⅰ)「過去」の内容に該当する言葉を、本文中から二五字以内(句読点や記号も一字と数える)で抜き出しなさい。

□ 次の文章を読み、以下の設問に答えなさい。

※著作権の都合で問題文は一部改変しています。

必要に迫られて初めて、「ああ、これはそんなに簡単なことではなかった」と気づくことがある。やや大きさに言えば、今の日本にとって、「往診」がそれではないかと思う。

往診という診療スタイルは昔からある。ただ、診療報酬上のルールでは、往診というのは、患者側からの求めを受け、できるだけ早く患者の家に（ア）赴いて診療する——ことを指す。事前に計画を立てて訪ねる一般的な訪問診療とは区別されており、要するに（突発対応）が求められている。

これは結構ハードルが高い。特にコロナ対応のように夜間も休日も関係なく、次々と患者が増える状況では、地域の小さなクリニックが「連絡を受けてすぐ行く」のは簡単ではない。都心ではビルに入居している診療所（いわゆる『ビル診』）も多く、医師の職・住が別なので時間外に即応できないという側面もある。

そこで注目を集めたのが、「往診サービス会社」である。コロナの前からあったが、コロナの社会になって（A）俄然<sup>がぜん</sup>、存在感が増した。

\* 東京・渋谷に本社を置く「コールドクター」は、株式会社であって、医療機関ではない。ただ、全国の10か所ほどのクリニックと提携し、400人以上の「往診医師」を抱えている。

まず同社が、電話やスマホアプリなどを通じて往診の①イライを受けける。そして、提携クリニックに所属している医師が、患者の家にすばやく出向く。診療には保険が使える。

私はこのカラクリが不思議だった。なぜ民間会社のサービスなのに、保険診療が受けられるのか。

\*

当然ながら、診療報酬は医療機関である提携クリニックに入る。一方でコールドクター社は、24時間体制のコールセンターを設けて往診を受け付け、診療報酬の請求事務のサポートなども行う。

つまり、医療以外のこまごまとした作業を一手に引き受けることで、同社はクリニック側から（イ）対価を得る。こうして往診サービスが成立している。

「ポイントは、多くの医師を集めることです」と、同社の「代表取締役医師」を務めるAさん（33）は語る。

往診医師たちは、提携クリニックの常勤医とは限らない。ふだんは大学病院や総合病院などに勤めている医師たちも、空いた時間に往診に参加している。医師がたくさんいれば、それぞれの空き時間を組み合わせ、夜間でも休日でも切れ目なく患者の求めに対応できるという仕組みだ。

（Ⅰ）一つひとつのクリニックでは難しかったことを、少しずつ分担して、時代にあったサービスにつなげる。発想としてはなかなかよく出来ている。

\*

こういう仕組みは民間会社に任せるしかないのか。

いや、（Ⅱ）地域の「往診力」は高まりつつある。自治体は往診できる医療機関をリスト化し、協力を出す事業を展開。医師会が②オンドを取って、交代で往診に取り組む地域もある。民間会社との連携も進んでいる。

考えてみれば、救急医療の逼迫を防ぐためにも、今後さらに進む社会の③コウレイ化に対応するためにも、往診は重要だ。家で突然、体調が悪くなった時、私たち患者はまず、「お医者さんに診てほしい」と（B）切実に思う。病気することは、医師にしか判断できない。「コロナで（ウ）鍛えられた地域の往診力を、コロナの後も④イジりたい。ピンチをチャンスに変えるべきです」と、自らも往診に出向いている東京都医師会理事（64）は言う。

急ごしらえとはいえ、簡単ではなかった道が開けてきた。こういうところにも、コロナの⑤イリヨクのすさまじさを感じる。

（出典 木下敦子 著「ピンチをチャンスに 高めたい「往診力」」『読売新聞』二〇二二年二月二七日〈広角多角〉欄）による）



